

# 明治家 実業列伝 ⑬

## 大泉 梅次郎

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



### 東北線の開業

明治二十(一八八七)年十二月十五日、たくさんの方が仙台駅に集まってきました。上野から徐々に鉄道を北に伸ばしてきた日本鉄道東北線が、この日、福島県郡山から塩釜まで開通することになり、その開通式が仙台駅で行われる予定だったのです。

鉄道開通を祝って花火が打ち上げられ、人々は初めての列車が到着するのを今か今かと待ちわびました。しかし一番列車は、福島県内で一メートル以上という季節はずれの大雪に阻まれ、仙台駅に到着したのは到着予定時間を三時間も遅れた午後一〇時二五分のこと。列車を待っていた人々の多くが、疲れ果てて帰宅した後でした。

こうして思わぬトラブルで幕を開けた東北線でしたが、明治二十四年には青森までの全線が開通。仙台周辺では岩切、長町、陸前中田(現在の南仙台)の各駅が大正時代までに開業し、東北地方の交通の大動脈としての機能を徐々に整えていったのです。

### 仙台駅前の発展

仙台駅が設けられた仙台の東六番丁は、もともと市街地の東端に位置する武家屋敷街でした。しかし、駅が設けられたことにより、一帯には開発ラッシュが起きました。商店や運送業者などの支店、飲食店、旅館などが次々に作られたのです。また市街地中心部が

ら駅へ向かう南町通や新伝馬町・名掛丁も発展し、近代都市・仙台の新しい発展が、駅を核として始動したのです。

仙台駅前に作られた新しい街並みの中でも人々の目を引いたのは、ホテルでした。仙台に作られた最初のホテルは、日本鉄道直営の仙台陸奥館で、明治二十三年三月の開業。客室は全て洋室で、それまでの旅館とは一線を画していました。明治二十五年七月には、名称に初めて「ホテル」の名を冠した陸奥ホテルが開業。そして明治二十九年五月には駅の真向かいで仙台ホテルが営業を開始しました。

針久や奥田などの和風旅館も立ち並ぶ一大激戦地となった仙台駅前で、仙台ホテルは洋風二階建ての建物で洋食を出すという「ハイカラ」さを売りにしました。明治三十八年には三階建てで展望用の塔を持つ建物に改築。駅の真向かいということもあり、仙台ホテルは仙台駅前を象徴する建物となったのです。

### 観光業の展開

この仙台ホテルを経営したのは、江戸時代から国分町で旅館業を営む大泉屋でした。当時の当主であった梅次郎は安政三(一八五六)年に老舗の肴問屋である梅村家に生まれ、養子に迎えられた人物です。梅次郎が入った当時、大泉屋の経営は思わしいものではありませんでしたが、闊達でアイデア・マンであった梅次郎は、またたく間に業績を回復させ、東北随一の旅館業者に発展させたのです。

その大きな転機が鉄道開業でした。鉄道の将来性を高く評価した梅次郎は、駅前に新出しようと金策に走りますが、街のはずれに土地を買おうとする梅次郎は変わり者扱いされ、誰も融資をしてくれません。最後に銀行へ行き「私自身が担保です」と見栄をきり、そのあまりの自信に感じ入った支店長がようやく融資をしてくれたおかげで、梅次郎は駅前に三三〇〇平米の土地を確保できたそうです。

この土地に旅館を建てた梅次郎は、これをホテルに発展させただけでなく、弁当部を作って、駅構内の売店や食堂、駅弁販売、急行列車の列車食堂(食堂車)・営業の権利を獲得し、一気に「仙台ホテル」の名前を東北一円に響かせました。

また梅次郎は、大手旅館と協定を結び、顧客を積み分けて共存繁栄を図るとともに、旅行客の便を一層向上させようと全国の大手旅館との提携も進めました。ほかにも団体旅行の企画、誘致を積極的に行い、松島を大観光地に発展させるなど、梅次郎は東北の観光業に大きな足跡を残しました。

新しい時代の波を的確に把握した梅次郎は、成長株の地元企業にも多くの投資を行い、仙台の実業界に大きな功績を残しました。昭和十二年(一九三七)年一月二日没。八二歳の大往生でした。



明治38年に建てられた仙台ホテルの建物。昭和20年の仙台空襲で焼失するまで、仙台駅前の顔として親しまれた

# 仙台市史

好評発売中

## 通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/櫛宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183  
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



明治30年代の仙台駅(個人蔵) 仙台駅が設けられた東六番丁は、市街地のはずれに位置していたが、駅前には旅館や商店、運送会社が軒を並べるようになり、市街地の一つの核へと発展していった。